

僕の旅について

たかはし さとし
高橋 聡

1. 動機 僕の旅
2. 対話まで S君について
3. S君との対話
 - 3 - 1. 役割について
 - 3 - 2. 隔たり
4. 結論 瞬間と世界
5. 終わりに

1. 動機

僕の旅

僕の興味・関心を過去、現在、未来に渡って思いつくままに書き出してみたところ、過去においてふたつの核が浮かび上がってきました。ひとつは「小説」(と言ってもただ濫読し、書く真似事をしただけです)、もうひとつは「旅」というカテゴリーで、このふたつが現在の僕(生活や仕事、研究)を位置付け、そしておそらく未来も方向付けていこうと思われのです。たくさんノートに散らばった、そのほかの興味・関心は、どれもこのふたつにつながっていきます。特に「旅」は、毎日のどこかでひょっこり顔を出すのですが、顔の出し方は様々で、匂いや音、色などに触発されて旅の一瞬にぐいと引き摺り込まれたり、(時には誰かの言ったせりふだったりもします)、或いは僕の世界の捉え方として現れたりもします。僕が言葉を、構造や語彙よりもメッセージ性の塊と捉えてしまうのも、そのひとつかもしれません。こうしたことがあると、現在もあの旅は僕にとって何なのだろうと考えることが多いのです。そこで、この機会に、僕は僕の旅についてゆっくりと考えてみたいと思っています。

僕の人生における「旅期」は、83年大学4年の12月から、父の死の準備のために帰国す

る 91 年 8 月までの、ほぼ 8 年間でそれに当たります。僕が旅に出たのは、とても小さなきっかけでした。真夜中の喫茶店で友人が、彼の友人だか知り合いだかが印度へ行ってきたという話をしたのです。その男によると、カルカッタの空港は格子状のシャッターで閉ざされていて、その格子状のシャッターに無数の人々がしがみつき、口々に何か叫んでい、空港の係官が人ひとり通れるだけシャッターを開き、旅人の背中を押すと、その乞食やら、物売りやら、タクシーの運転手やら有象無象の輩が今度は一斉にその旅人めがけて押し寄せてくる、と言うのです。それはわくわくするような話でした。おお、行ってみたい、それが始まりでした。おそらく当時の僕は非常に退屈していたのです。その 2 ヶ月後、オートバイを売り、アパートを友人に貸して、僕は初めての飛行機に乗りました。

こうして僕は旅を始め、いつのまにか大学も辞めており、2 度程短い帰国をしますが、アジア、ヨーロッパ、アフリカと旅を続けました。旅費を稼ぐのはヨーロッパで、特にアムステルダムでは合わせて 4 年近くを過ごしました。旅の話を人にすると、何故、何のために、そこで何をして、何を得たのかと聞かれます。それは僕にとっては、とてもナンセンスな質問で、「だから旅だったんだってば」というひとつの答に集約されるのです。少年時代、僕は散歩が好きで、よく夕方の光が立つ時間、行き先も決めず散歩に出ました。美しい光の一瞬に出会ったり、空が色をうつしていくのを眺めたり、草の香をかいたり、寝転んだり、歌ったりしながら、色々なものを感じていたり、考えたりしていたのだと思います。時にはかなり遠くまで出掛けてしまい、夜遅くに家へ戻ったりすることもありました。喩えていえば、僕にとって「旅」はこの散歩の延長なのです。ただ時間や距離が伸びたというだけで、僕が僕でいられる異空間を歩くことでは同じなのです。もちろん、この時間、距離の違い、異空間、人々が、僕に及ぼしたものには、散歩と違うエネルギーがありました。それについても、今回ゆっくり考えていこうと思います。

2. 対話まで

S 君について

僕は最初、旅の経験のないひとりの友人を対話の相手に、と考えていました。彼は中学・高校時代からの友人で、旅の間いつも、その体験をいちばんに話したいと思っていたのが彼でした。けれども、情況的に会える時間がなかなか作れないでいる内に、「旅」というテーマがあまりに大きいことに僕は段々不安になってきました。もう少し焦点化した方がい

いのかもしれないと思いはじめてきたのです。そこで、旅の経験もあり、同じ日本語教師でもある友人に対話の相手を頼むことにしました。「旅」と「現在・将来」を結ぶものとして「日本語教師」を置くことで、もう少し具体的な話ができるのでは、と考えたのです。彼とは、似た道を歩んできたのですが、「旅」や「日本語教育」についてはあまり話したことがなく、この機会に改めてそれを話し、僕たちの関係に新たな意味をみつけられたらいいという思いもありました。

この友人S君とは、19年前にネパールのポカラという村の安宿で出会い、数日を一緒に過ごしました。彼は当時大学の4年生で、小説を書いていると言ったのがきっかけで、話をするようになったのだと思います。正直に言って、当時のことはあまり覚えていないのですが、湖のほとりを散歩したり、食事をしたりしながらポツリポツリと話したのだと思います。この村からはマチャブチャレを真中に何千メートル級の山々が毎日美しく見えていて、S君の頭の向こうに蒼い山々が連なっていたのは覚えています。数日後彼は印度に旅立ち、僕はそのままネパールに残りました。そしてその3年後、僕たちはとても数奇な経緯で、東京で偶然再会するのです。再会して1年後、僕は日本語教師になり、ベトナムへ向かいますが、その1・2年後彼も日本語教師となって中国へ行ったという便りを受け取ります。それぞれが帰国し、日本語教師を続け、僕が大学へ戻ろうと思った頃、彼も日本語教育の大学院で研究を始めました。日本語教師も大学についても、互いに話したことはなかったのですが、久しぶりに会うと同じような道を歩んでいるのでした。ポカラや東京での出会いのように。彼は去年、中国での日本語教師の経験を題材にとってもいい小説を書きました。「旅と日本語教師」というテーマで、何か発見があるかもしれない、そう思って彼に電話をすると、生まれたばかりの二人目の息子がかわいいという自慢話の合間に承諾もしてくれたのです。「旅か…う～ん」という言葉とともに。

対話の前日、僕は妙に緊張してしまい、眠れぬままに、旅の途上につけていた日記を引っ張り出して読んでみたり、質問事項を書き出してみたりしていました。そして「旅」に答えを出すのは絶望的だという思いをますます深くしていたのです。思った通り、それは難しいものでした。ここに報告するのは果てしなく続く「旅についての対話第1弾」という位置付けで、まだ始まったばかりのようです。

3. S君との対話

僕たちは、S君がタダ券を持っているという池袋ジュンク堂書店のカフェで話を始め、途中お腹が空いて、ハウスミュージックが頭上を流れ、ケバブが印度カレーの上に載っている不思議な印度料理屋へ移動しました。移動を含めて、3時間ばかりの対話でしたが、前夜の緊張を引き摺って僕は始終緊張していたように思います。ひとつの原因は僕たちの真中に置かれたICレコーダーでしたが、それよりも、対話の始まりから僕は「隔たり」を感じていたのです。S君と僕は年に3・4度互いの家を訪問したり、外で飲んだりして会うのですが、その時々ペースとリズムで話をしていました。庭に座り、それぞれの想いにふけったり、ふっと思いつくと口を開いたり、S君はそんなゆっくりとした、気ままな対話相手でした。けれども今回は目的を持って対話をしなければならないのです。時間も限られています。いつもの「隔たり」、それが僕の考えと言葉の「隔たり」に拍車をかけ、S君との「隔たり」を感じ、そしてS君も最初緊張している風でした。

3 - 1. 役割について

対話は最初、日本語のクラスと日本語教師養成のクラスで僕を感じる違いが「旅」と「生活」との違いに似た感じがするところから始まりました。勤めている日本語学校で、僕は、日本語の非母語話者に向けての日本語のクラスと95%が日本語母語話者の日本語教師養成クラスの両方を担当していますが、それぞれのクラスで違った僕が引き出されている気がしているのです。日本語のクラスでは、教師というより、僕という人間がより引き出され、養成クラスでは、僕という人間より、教師という役割がより引き出されるように思います。学生の側から見ると、日本語の学生は人間としての僕を求め、養成では、教師という僕を求めているように感じます。養成の教室でわずかに僕という自分を出したことで、クレームを受けたことが何度かあります。自分を出すというのは、僕の考え方や価値観、意見を述べるということです。この教室の姿が、「旅」と「生活」での違いに通ずるような気がする、ここから話が始まったのです。

僕：養成では、知識を求めているんだね。知識を欲しがらる。知識にお金を払ってる、それ以外は興味がない、いらないうっていう…皆が皆ではないし、クラスによっても違うけどね、でも、そういうエネルギーを感じる人が多い。日本語の教室にいと、自分がこう出てくる。引き出される。

S：そうねえ、言葉を使うというのは、もしかしたら、言葉そのものを教える、というのは、うーん、何かあんまり教えるという感じじゃないんだけど、なにか、言葉を、そのものを使って、そのもので何か…

僕：やりとりというか…そのものが…

S：うん、やりとりをしてる。そういう感覚がもしかしたら…

僕：それを、そういう関係をつくっているのかもしれない。

S：うん、つくってんのかもしれない。まったく利害関係がないという時でもそんなことを感じるわけ？

僕：そうか、要するに役割を設定してしまうか、しないか（うん）それで役割があると、それに付随した利害が生まれる？

S：かもしないね。

僕：それじゃあ、日本語の教室の中では、あんまりその利害というのは、利害というか役割自身が、もっと自由なものわけだね。

S：うーん、そうなっちゃうか。

僕：役割として捉えてない？あの仕事を？

S：そうではないと思うけどもね…やっぱり学生は先生だとは思ってると思うけどね。でも、何故か、あなたは何かしなければならないとか、あなたの知識は何ですかみたいなことは、問われてる感じはしないんだなあ。

僕：ここにいる人間を役割として見てはいるけれども、役割を透して人そのものをみてるっていうのかな。そこでのやりとりの中の人…、つながりかなあ。でも、まあ教師であるということは意識しているはずだよね。

S：うーん、でも、役割ってなんだろうね。何かの関係で、例えばさ、学外とかで人とあったりして、人と話をするとするじゃない、そうすると役だね、あなたは何々の役、あなたの役、っていうのの設定をはっきりしないと、その人と話ができないの。だけど、そのう、旅で誰か人に会う時というのは、そういうのは非常に希薄な感じがする。

僕：役割ってというのは設定しないってことか…

S：決まり事としての役割って言うのを、っていうか、ほとんどもう決まり事ってないじゃない。だから、自分にある決まり事をもってくることはまずできないわけだね。

僕：じゃあ、何が主体になるんだろうね。旅では。裸でいるしかない？

S：裸って言うのが本当にあり得るのかどうかはわからないけれど、でも、すごく、あの自分を問われるとは思うよね。うん、ごまかしがきかないっていう感じがすごくする。

僕：うん、でもね、日本語教師やっててまさにそこを思うんだよね。ごまかしがきかないって。知識であるとか、技術であるとか、もちろん必要なんだけど、最終的に問われるのは、人なんじゃないかなあって気がするんだよね。養成の授業みたいに、知識を与える役柄として教師があるとすれば、たぶん長く続けられないんじゃないかな。求められた役割をこう演じてしまうと、退屈しちゃう。日本語のクラスは、こうことばをやりとりしながら、自分ていうか、役割をはぎとってるんじゃないかなあ。そこが旅に近いのかな、(日本語教師を) こう続けてる。

S：でも、だからといって、教室にいるから、じゃあ、旅に出なくてもいいやとは思わないんだよね。

僕：そりゃ、まあね、その人的関係だけじゃないからね、旅を支えているものは。

3 - 2.

隔たり

養成クラスで感じる僕の違和感や「旅」について、「役割」という言葉で僕たちは考えていきます。それはその通りだろうとは思いますが、まだ僕の内には、最初に感じていた「隔たり」感が残っていました。結論を急いでいるような、早く結果を出そうと焦っているような、そういう感じがしていました。役割を剥ぎ取られた僕と役割を着た僕と、そこにも隔たりを感じていました。「役割」はこの「隔たり」を説明することはできますが、「隔たり」の解決にはならない気がしていたのです。「旅」での僕とここで「生活」している僕との隔たりはそのまま、次の僕の台詞に引き継がれています。

僕：旅の行為っていうのはさ、ひとりで考えたり感じたりすることが滅茶苦茶多いわけだよな。

S：そりゃそうだよね。ほとんど、のべつ幕なし考えてるよね。どうでもいいことばかり考えてるかもしれないけど、とにかく考えてるよね。

僕：それがさ、僕はどっかにそれが蓄積されてると思うのね。そこで考えていたもの、感じていたもの、で、それが表に出てくるってのは、極一部であって、旅を終えた瞬間、何かあそこにいた僕というのはどっかに行ってしまっていて、でもどこかに蓄積されてるって信じているので、今こうやって生活している中で時々浮上してくるんじゃないかっていう期待がある。それを何とかつかみたいというのが、この対話のひとつの目的だったんだけど、でも、そう考えてしまうこと自体が、さっきの役割みたいに、旅での役割みたいなものを求めてしまっているんだねえ。

僕はこの「隔たり」が気になっていました。僕たちはいろいろな場面に合わせて役割Aや役割Bを演じたり、引き出されたりしています。そして、そのAやBを繋ぐ自己の存在を信じています。それが自己同一性(アイデンティティ)と呼ばれるものですが、本当にそうなんだろうか、その自己を設定することが、実は「隔たり」を生んでいるんじゃないのかなと僕は口にします。旅だったり、生活だったり、養成の、或いは日本語の学生だったりに引き出され、関係性を持っている「僕」を、そのまま「僕」と思った方が「隔たり」を感じなくてすむように思ったのです。それに対して、S君はその関係性を水に浮かんだAとBの物体で説明しようとしています。

S：例えばさ、ここにモノでもヒトでもいいけどAという物体があって、こっち側にもBという物体があって、それを水が囲んでる。Aが動けば波が起こって、Bが動いても波が起こって波と波がぶつかる。やっぱりどうして波がぶつかったかを知る為には、どうしてAとか、Bが波を起こしたか、なんで動いたかを知りたい。波という媒体じゃなくて波を起こした主体。

僕：でもさ、AもBも、波を起こそうとして動いたとしても、(波を)起こすつもりはなくて、ただ動いただけでも、起こる波は同じじゃない。波がぶつかるのも同じ。どうしてAやBが動いたか、がわかって、ぶつかった波は解決しない…

S：うーん、それはそうだけれども、やっぱりこの主体が知りたいんだな。この最初が知りたい。

僕：うん、僕の興味も本当はそこにあるんだけどね、ただ、この関係性を中心にした方が、何て言うのか…

S：説明がしやすい。

僕：うん、主体と媒体って言うか、媒体を言葉として考えてしまうと、やっぱり主体の思考と言葉に隔たりが生まれちゃう。そうするとAという存在は思考と言葉のふたつに分離しちゃう。波って言うか、言葉そのものがつくる、相手や状況との関係性を取りあえず僕とすると、隔たりは生まれませんか？

S：うーん、僕は宇宙の始まりが知りたいんだけどねえ…始まる一点。

この、どこに僕という主体を置くかは、僕がここ数ヶ月考え続けていたものでした。頭の中にある自分を僕だとすると、どうしても、頭の中の僕と言葉で表わされる僕のふたつが分離してしまいます。そうすると、いつも僕の言葉は本当に言いたいことと違うと思いついてしまいます。どこまで自分を開示するかも、同じジレンマから生まれます。表に出す自分と隠す自分を意識的に分離させているわけです。そして同時に、自分と相手とが分離していると感じ続けながら会話を続けることになります。今、相手と対話をしている言葉として現れているもの、そのものを僕、今、ここでの僕と考えれば、この分離「隔たり」感からは抜け出せると、僕はS君と話しながら、体験という形で感じていました。

僕：そうすると、さっきの役割も違うのかな。

S：そっちで説明すると違ってくるよねえ。

僕：うん、役割を演じてるって思うってことは、ふたつの僕を想定しているわけだよねえ。本当の僕だと考えてる僕と、役割を演じてる僕。その違和感、そこでの僕が僕と思えば楽になるねえ。ほー、旅とか、日本語教えてると、分離って言うか、その、なくて、んん、ないわけじゃないけど、自然にその僕を僕だと思えてるっていうわけか。

S：それはあるね。相手に期待しないっていうのかな、ヘンな意味じゃなくて、言葉とか、行為とか通してしか、自分が伝わんないって思ってる。分離してる暇もないし…

僕：そうね、気がつくと巻き込まれてる。何か言うしかない。あっ、それ？裸って。でも、逆に、何か滅茶苦茶分離してることもあるけど。でも、だから余計言葉になるねえ。無駄なこともあるけど、何か必死で訴えてるねえ。元気あるときは。

S：そうね。

僕：相手があつて、僕があるのか、んん、お互いがあるんだ。独りで考えてるのはアイドリ
ングか、あつためてるわけだ。走るまえに。

この辺から僕たちは、それぞれの思考に入り始めていたと思います。S君は宇宙の始まりをいかに解明するか、物理学や宗教について考えているようでしたし、僕は僕で、「今、ここでの僕」について考えていました。そしてお互いに自分の思考をそのまま独り言のように口にしている状態でした。対立するもの、「思考」と「言葉」の僕、「養成」と「日本語」の僕、「旅」(経験)と「生活」(今)の僕、「役割」と「裸」の僕、「僕」と「他者」、それらを繋ぐものを僕は探していました。でも、それらを繋ぐものを想定することが、これらの対立を生んでいることに徐々に気がついてきました。そんなものはなく、今ここにある僕、S君にわかってもらおうと話すことで現れる僕、わかろうとして語りかけてくるS君の、S君と僕のやりとりの中に、瞬間、瞬間に、立ち現れてくる僕たち。

僕：瞬間なんだねえ、瞬間、瞬間。

S：そう言えば、旅が蘇るのは、子どもが生まれてからだねえ。

僕：え？どうということ？

S：この一瞬この一瞬は、再現性のない、というのは子どもの成長が速いから。こっちが歩いている間に、向こうが走ってっちゃうんだね。一瞬一瞬感じるしかない。だからこそ、すごく嬉しいんだけど。

僕：ああ～、瞬間だねえ、子どもも旅も。

ここで、僕たちはまた交わります。そして、これを読めと言って、前の日に引っ張り出し、その日持ってきていた古い旅の日記の裏表紙を僕はS君に見せました。そこには、どの旅にも携えていた詩が僕のきたない字で書かれています。

童心占徴

ひとつぶの砂に世界を観る
一輪の野花に天界を眺める
汝の掌に無限を握れ
そして一刻のなかに久遠を

W.Blake

そして、宇宙の始まりもこれなんじゃないのにつけくわえると、そりゃそうなんだけどね、観るとか眺めるとか、できないから悩んでるんだよね、と言ってつまらなそうに日記をめくっていました。

4. 結論

瞬間と世界

さあ、子どもたちに会いに行きますか、と言って、僕たちは不思議な印度料理屋を出ました。こうして僕たちの第1回目の「旅」についての対話が終わります。

このレポートのテーマは、「僕にとって、あの旅は何だったのか」ということを考えてみたいということでした。つまり、「旅」と「現在」を繋ごうとする試みでした。そして結論として得られたものは、繋ぐという発想が「旅」と「現在」を隔てる原因になっているということでした。繋ぐという発想は、それぞれにある僕を固定した僕像として捉えて、それに意味づけをしようということでした。けれども、まず、固定された僕などはどこにも存在していません。あるのは、瞬間、瞬間の連続の中で立ち現れる「僕」という現象です。そしてこれは、旅を続けているとき、いちばん自然に感じていた感覚でもあります。「今、ここで」という瞬間を重ねることで旅が進んでいきます。ダカールからバマコへの列車の中で、先頭車両の窓に額をつけたマリの女の子が「わたしがいちばんはやい、わたしがいちばん！」と言っていたのを思い出します。彼女は列車の先頭を時間の先端に重ね合わせていたのだと思います。窓の外を瞬間が絵を伴って流れていくからです。移動していく行為が流れていく瞬間を意識させ、深く心に刻みつけます。

でも、こうして同じ場所に暮らしていると、この瞬間、瞬間に鈍くなっていきます。いつも世界が変わらずにそこにあり、毎日毎日が同じように繰返されます。すると、僕という存在までも何か固定されたように、ある、と信じてしまうのです。そして役割を着替え

ているだけだという感覚を身につけ始めます。変わらぬ僕がいるかのように。

移動と同じように、言葉もこの瞬間、瞬間を意識させるのに役立つように思います。対話という行為が新しい僕や相手を引き出し、先ほどと違う僕、相手との関係が立ち現れ、その時の、その関係の中の僕を生かしてくれるからです。言葉も時間の先端に重なります。

「旅」とは、瞬間の発見だったように思います。瞬間に開く世界を観る、Blake の詩を旅の上で僕は何度か体験しました。陽が落ちていく空の瞬間、瞬間に、見知らぬ人と手を握り合った瞬間に、動物の目の光の一瞬に…そう言うと、S 君も納得しているようでした。「今、ここで」を重ねていくなれば、「旅」は「今、ここに」あるようにも思います。

5. おわりに

1月23日で、この「考える 7-8」のクラスが終わりました。実は、僕はこのクラスでも「旅」を感じていました。「考える 7-8」のクラスが12人のひとつの社会で、そこから僕たち12人は、あるひとりの「対話の相手」を求めて、それぞれ思い思いの方向へ旅に出たように思うのです。そしてその旅で経験したことを、「考える 7-8」村に戻り、話して聞かせたり、「旅行誌」(レポート)の形にまとめたりして、報告し合ってきました。僕たちは、12人の旅仲間の話に耳を傾け、同じ旅人の記録としてレポートを熱心に読み、その彼・彼女の旅を、旅をしてきた者だけの視点で読みとっていたのだと思います。

ひとり、ひとりが異なる旅を経て、また戻ってくる。「旅」の最後の行き先はHomeで、「旅」は、元の場所にぐると帰ってくることで完結します。けれども、「旅」を経て戻ってきた元の場所は、出掛けた時とは違って見えてきます。そこに「旅」の力を感じます。そして、僕の場合、「旅」は、消化するのにとても時間が掛かります。何年も経って、そのときの「旅」が見えてくることが多いのです。今度の「対話の旅」も、時間を経て、また別な姿として見えてくるのかもしれない。

最後に、恥ずかしいのですが、正直に言うと、僕は誰かに「おかえり」と言ってもらうために「旅」をしていたのではないかと思うのです。「ただいま」と言って、旅の話聞いてもらいたくて、Homeを目指して「旅」を続けていたのだと思います。

28.Jan.2009

Satojie